



Title	17世紀初頭のチリにおける「人食い」：アロンソ・ゴンサレス・デ・ナヘラの見たマプーチェ（上）
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17, p. 135-147
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

17世紀初頭のチリにおける「人食い」

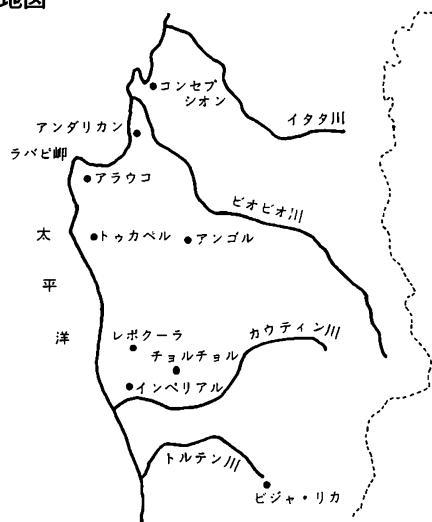
—アロンソ・ゴンサレス・デ・ナヘラの見たマプーチェ（上）

千葉 泉

〈序〉

今日チリ南部にはマプーチェ、あるいはアラウカーノスとよばれる原住民が居住している。16世紀中頃のスペイン人到来当時、チリ南部イタタ川からトルテン川にかけての地域に居住していたマプーチェは、スペイン人の征服と支配の意図に対し長期にわたって抵抗し、他のスペイン系植民地の原住民集団と比較して、植民地時代を通じて極めて高い自立性を保持したことで知られている⁽¹⁾（地図参照）。

地図



こうしたマプーチェに対し、今日チリにおいては一般に、「スペイン人の支配に対して闘い、自由を守り通した勇敢な民」といった「英雄的」イメージが党派を超えて持たれ、さまざまな形で利用されているように思われる。例をあげよう。

1960年代にチリでは「新しい歌」と呼ばれる社会派音楽の運動が盛り上がるが、その代表的な音楽グループにインティ・イジマニがある。彼らは1970年に左派系の人民連合政府が誕生すると、文化大使として諸外国を演奏して回り、1973年にピノチエ将軍率いる軍事クーデターが起こると、イタリアに亡命し、軍事政権を批判する作品を発表していった。

さて、このように、思想的には左派に属するといえるインティ・イジマニがクーデター後に作った作品の一つに「自由をめざして (hacia la libertad)」がある。この歌の歌詞は、軍事政権に反対し、自由の回復を訴えるという内容になっているが、その中でマプーチェに関する部分がどのように用いられているか見てみよう。

はるかに広がる祖国よ／種子とパンと銅と
 お前は処女の大地から／自由のために闘う子らを生む
 アラウカニーアの／不屈の声
 夜明けのたびに／ラウターロは叫びを上げる
 [Inti-Illimani]

ラウターロは、マプーチェのあるカシーケの息子で、はじめスペイン人征服者ペドロ・デ・バルディビアに馬丁として仕えていた。しかし、1553年のトゥカペルの戦いの際にマプーチェ側に移り、その勝利の立て役者となった。この歌詞の中ではラウターロがスペイン人の主人バルディビアを「裏切った卑怯者」としてではなく、祖国を救うべく闘う「英雄」として肯定的なイメージで認識されていることがわかるだろう。要するに、「軍事政府を打倒」し、「自由をかちとる解放者」のシンボルとして「不屈の民マプーチェ」の英雄ラウターロの名が呼び起こされているのである。

さて、一方右派はどうであろうか。ここに、「マプーチェ族：ある民族の現在と将来」という軍事政権発行（1989年）の小冊子がある。その中に、チョルチョル市で当時のピノチエ大統領がマプーチェに向けて行なった演説が載っているが、そこには次のような表現が見られる。

「きわめて早い時代から、この（マプーチェ）民族は、英雄的な高潔さと祖国の大地に対する不屈の愛とをチリの歴史に残してきた。」

「こうした（マプーチェの）特長とスペイン人の血とが融合し、結果として誇り高く勇敢な国民が生まれたのである。そしてこの国民は決して外からの支配に従属することなく…」

[González y Lopez 1989:38] (括弧内および下線筆者)

こうした言葉からも、マプーチェは祖国を守るべく闘った不屈の民であり、チリ国民は外部の支配に屈しない勇敢な気質をマプーチェから受け継いだのだ、といった非常に肯定的なイメージで表現されていることがわかる。

要するに、「自由と祖国を守るために、他者の支配に対して勇敢に闘った民」といった肯定的・英雄的なマプーチェ像は政治上の党派を超えて広く定着したイメージの一つとなり、さまざまな形で利用されてきたことが認識できるだろう。

マプーチェに対するこうしたイメージの萌芽ともいいくべきものは、実は古く征服当初の時期から見られた。総督ウルタード・デ・メンドーサに随伴してチリを訪れ、1557年から58年にかけてマプーチェとの戦いに参加した兵士アロンソ・デ・エルシージャは叙事詩「ラ・アラウカーナ、第一部」(1569年初版)の序文で、次のように述べている。

「アラウカーノスの保有する土地はわずか20レグアに過ぎず、そのどこにも町も壁も防衛のための要塞も、また少なくとも防御用の武器も持たないので、長期にわたる戦闘にて多くのスペイン人の命を奪ってきたこと、それも堅牢ではなく、スペイン人の三つの町と二つの要塞に囲まれた土地で、ひたすら勇気と強固な決意で自由を取り戻し、維持した……ことはたしかに感嘆すべき事である。……こうしたことを行が述べたのはすべて、詩行で表現できる以上の賛辞にふさわしい、この人たちの勇気を保証したいと思ったからである。」

[Ercilla 1970 : 25-26] (省略部筆者)

こうした言葉は、まさに「自由を守るために、勇敢に闘う民」といった英雄的マプーチェ像を表してはいないだろうか。エルシージャはスペイン人

による征服そのものを批判しているわけではなく、むしろ彼らの征服の「偉業」を讃えることがこの叙事詩の主要な目的の一つであった。しかし他方で、スペイン人の支配を嫌い、反乱を起こしてしばしば激戦のすえこれを打ち破ったマプーチェを、ときに不屈の勇者として英雄的色彩とともに描いていることも、詩文からうかがえる。

したがって、今日広まっている英雄的マプーチェ像の少なくとも萌芽は、すでに「ラ・阿拉ウカーナ」に描かれていたといえるだろう。

しかしながら、マプーチェに対し、必ずしもこうした肯定的な英雄的マプーチェ像だけが、チリの歴史を通じて一貫して持たれてきたわけではない。

16世紀末から17世紀初頭にかけてのマプーチェ大反乱の直後、マプーチェとの戦闘の最前線に位置するある要塞でスペイン人側の兵士を指揮した軍人にアロンソ・ゴンサレス・デ・ナヘラがいる。彼はのち1614年に、イタリアにおいて、かつてインディアス会議の議長であったレモスの伯爵に捧げて執筆した報告を完成しているが、この報告には、上に述べた肯定的で英雄的なマプーチェ像からはかけ離れた、貧相で怠惰で、しかも残虐この上ない「人食い」であるといった、きわめて否定的なマプーチェ像が描かれている。

こうしたことから、少なくともマプーチェに対して必ずしも常に「不屈の勇者」という肯定的なイメージが持たれ、あるいは記録されてきたのではないということは推察されるだろう。

もしそうだとすれば、過去においてどのようなマプーチェ像が、どのような人々によって、何故そのような形で表されてきたのか、またいつ頃から、何故、「勇敢で不屈の民」といった英雄的イメージが典型化されていったのか、という問題は興味深い。

本稿では、こうした問題を追求していく一つの作業としてゴンサレス・デ・ナヘラの報告を取り上げ、他の若干の記録とも比較しつつ、マプーチェがどのようなイメージで取り上げられているか、そしてそのようなマプーチェ像が描かれたのはなぜかを考えたい。

始めに同報告が書かれた時代背景と目的を考察したあと、ゴンサレス・デ・ナヘラがそこで描いているマプーチェ像を具体的に分析することにより、そのようなマプーチェ像が呈示されている理由について推察を加える。

〈注〉

- (1) 「マプーチェ」、「アラウカーノス」という呼称の定義は歴史学、文化人類学等分野によって統一されていない。本稿では「マプーチェ」という呼称を、征服当時、イタタ川からトルテン川にかけて居住していた民族という狭義の意味で用いる。

1. ゴンサレス・デ・ナヘラの報告が書かれた背景と目的

スペイン人、アロンソ・ゴンサレス・デ・ナヘラは、フランドル戦争において鍛えられたベテランの軍人である。彼は、チリにおけるマプーチェとの戦争の情報を耳にすると、マルティネス・レイバ率いる補強部隊の一員として1601年にスペインを出発する。チリ到着後、当時マプーチェが支配する地域の実質上の境界となっていたビオビオ川沿いに位置するミジャポア要塞に赴任し、守備隊の司令官として5年間任務を遂行する。その後サンティアゴに2年間滞在したあと、ガルーシア・ラモン総督の命を受け、国王に当時の戦争の状況を報告し、救援を要請するために1607年チリをたち、翌年スペインに到着する。そして、この時の報告をもとにしながら、より詳しい記録としてイタリアのトスカナの地で1614年に完成させたのが、本稿で扱う「チリの戦争に関する誤謬認識と修正 (Desengaño y reparo de la guerra de Chile)」と題された報告である。

この報告の書かれた時代背景がどのようなものだったか簡単に見てみよう。

ペドロ・デ・バルディビアが1550年にコンセプシオン市を建設して以降、スペイン人たちはマプーチェを支配し、一定地域の原住民を征服の功労者に割り当てるエンコミエンダの制度を通じて原住民の労働力を利用することを試みてきた。しかし、1553年にトゥカペルの戦いでバルディビア軍をほぼ壊滅させたマプーチェは、その後も度々反乱を起こし、特にビオビオ川からトルテン川にかけての地域は安定的にスペイン人の支配するところとはならず、ほぼ恒常にどこかで戦闘が行なわれているというような状況であった。

16世紀の末にはスペイン人にとってさらに悪い状況が訪れる。1598年に和平を通じてマプーチェを統合しようと試みていた隠健派のロヨラ総督が奇襲に会って殺害されると、マプーチェはより南部に居住する原住民ウイジチェも巻き込んで一斉蜂起する。こうして、1604年までにインペリアル、

アンゴル、ビジャ・リカなどスペイン人がチリ南部に建設した諸都市、そして要塞のほとんども破壊あるいは放棄され、ビオビオ川からトルテン川にかけてのマプーチェ居住地域から、スペイン人の影響力はほとんど消滅してしまうだけでなく、スペイン人がほぼ安定的に支配してきたビオビオ川以北の地域の安全さえ保証されないような事態となる。

こうした危機的状況の中で、チリ植民地社会の要請を受け、王室はマプーチェとの戦争の遂行方針を次のように変化させる。

まず、軍隊の変化がある。それまで、マプーチェとの戦闘を遂行していたのは、軍役と徴発義務を負ったエンコメンデーロス（エンコミエンダ特権の受益者）を中心に構成される民間的な性格の強い軍隊であった。しかし、スペイン人に従順な地域の原住民人口の減少や長期にわたる戦闘の負担などの要因によりエンコメンデーロスは困窮化して行き、終には16世紀末の大反乱によって、このような形の軍隊の限界があらわとなる。こうした状況のもと、エンコメンデーロスらの強い要望を受け、マプーチェの完全な平定を実現するため、1600年の勅令で、チリに専門的な常備軍を設置することが決定され、ペルー副王領の王室費から毎年定額の資金が投じられることになる。

また、軍人、王室官吏、教会関係者、エンコメンデーロスなど幅広い社会集団の執拗な要請を受け、1608年には、マプーチェとの戦いを短期に終結するための手段の一つとして、戦闘で捕虜にしたインディオを奴隸にすることを許可する王室の勅令が発布される。^[1] 原住民の労働力に対する需要を背景に、戦争捕虜を奴隸化する習慣はこれ以前から存在したが、これ以降は王室の公式の許可のもとに、より大きな規模で行なわれることとなる。

このように17世紀初頭当時チリでは、南部におけるスペイン人の支配の基盤そのものが揺らぐような危機的状況の中で、いかなる方法を用いてでもマプーチェの完全な平定を実現すべしとする強硬的な意識が支配者層の人々の間で優勢となっていたといえるだろう。^[2]

こうした状況を背景にして書かれたゴンサレス・デ・ナヘラの報告の主な目的は、これまでマプーチェに対して取られてきた方針および軍事戦略上の誤りを指摘し、早期にマプーチェ平定とチリ征服の完了を実現する方策を提案することであった。

まず基本的な方針としてゴンサレス・デ・ナヘラは、これまでしばしば

とられてきたような、和平を通じてマプーチェを平定・統合するという穩健的な方針を否定し、あくまでも完全に軍事力によってのみマプーチェを平定できるという強硬的な立場に立っていた。

こうした立場に立つゴンサレス・デ・ナヘラが提案する具体的な戦略修正案は、ほぼ次のようなものであった。まず、従来マプーチェ地域内に乱立していたために、戦略上の効果が極めて薄かった要塞を整理し、ビオビオ川沿いに大小合わせて11の要塞からなる要塞線を築いて兵力を集中する。こうしてビオビオ川以北のスペイン人支配地域の保全を確保しつつ、要塞線から反抗的なマプーチェ集団に対して容赦なく攻撃を加え、これを片っ端から殺害していく。また捕虜となったマプーチェを奴隸として大量にチリの領域外に追放し、その反乱の可能性を封じる。こうして、ある程度ビオビオ川付近の地域が平定されたあとで、要塞線を南下させる。こうして終には完全にマプーチェ居住地域を征服する。また、すでに奴隸として捕獲され、チリ中北部において労働力として利用されている原住民も、反乱を起こす可能性大として、売却または黒人奴隸との交換という形で域外に追放する。この過程で、不足する労働力は黒人奴隸を輸入することによって補う。

要するに、殺害または奴隸としての放逐という形で反抗的なマプーチェ集団を物理的にチリの領域内から消滅させ、エンコミエンダ制に従順な集団や「インディオス・アミーゴス(友好的インディオ)」⁽³⁾とよばれる軍事面でスペイン人側に協力的な集団など一部の集団のみ域内に残しておく。このような考え方であった。⁽⁴⁾

捕獲したインディオを単に奴隸化するだけでなく、すでに奴隸となっている者とともにこれを域外へ放逐することを提案していることから、ゴンサレス・デ・ナヘラが対マプーチェ強硬論の中でも、かなり極端な立場に位置していたといえるだろう。

以上から、ゴンサレス・デ・ナヘラは、チリ植民地の支配層の間でマプーチェの完全な平定を強く望む意識が高まっていた時代に、特に強硬的性格の強いマプーチェ対策を含む戦略修正提案を行なっていた、といえるだろう。

<注>

- (1) 同勅令の全文は, [Alvaro Jara y Sonia Pinto 1982:254-256] 参照。また, 同勅令が出されるまでの過程については, [Alvaro Jara, 1990:186-230] 参照。
- (2) 一方こうした強硬論に対し, 国王の信頼を得たイエズス会のルイス・デ・バルディピア神父の主導で, 1612年からマプーチェに対し「防戦」と呼ばれる穩健的な政策が試みられる。しかし実際には双方の戦闘行為は止まず, 1627年「防戦」は失敗に終わる。国王の承認のもとに行なわれた「防戦」ではあったが, 当初からチリのスペイン人社会の大半の集団は, イエズス会を除き, ほぼ一致して「防戦」には反対で, 対マプーチェ強硬策を望んでいた。
 「防戦」を定めた勅令の全文は, 「A. Jara y S. Pinto, 1982:262-265」参照, また, 「防戦」の実態については, [Ricardo Ferrando Keun 1986:172-193] 参照。
 なお, ナヘラの報告が完成した1614年に, チリでは「防戦」が実施されていたことになるので, この報告が穩健な性格の強い「防戦」策を意識し, これを批判するという意味も込めて書かれた可能性も考えられる。
- (3) 「インディオス・アミゴス」とは, ナヘラによれば, 一斉蜂起時に反乱に加わったものの, その後和平に応じ, スペイン人側に軍事的に協力してきた一部の集団で, トリブート(貢租)や労働の義務は免除されていた[González de Nájera 1889:252,282]。ナヘラはマプーチェ平定の際の「インディオス・アミゴス」の軍事上の有用性を重視している。
- (4) 以上, 戦略については [González de Nájera 1889:212-302] 参照。

2. 「たくましくない」マプーチェ

すでに見たように, マプーチェの完全な平定を達成するため, 強硬的性格の強い提案を行なっているゴンサレス・デ・ナヘラは, マプーチェをどのようなイメージで描いているだろうか。

ゴンサレス・デ・ナヘラの報告は全5巻で構成されている。まず第1巻は, 全体の理解の基礎となる, チリの地理上の特徴や, あるいはその原住民の特徴に関する叙述を中心とする5つの報告から成り立っている。また第2巻, 第3巻ではマプーチェがかくも長期にわたってスペイン人に抵抗し得ている理由をそれぞれ主にマプーチェ側の要因, スペイン人側の戦略上の要因に焦点をあてて説明した部分である。最後に, 第4巻と第5巻では, 取られるべき新しい戦略が具体的に提案されている。

このうち, 第1巻の第3の報告は「チリのインディオの眞の特徴と性質」と題され, マプーチェについてスペインで持たれている「誤った考え方」を

正すという目的で書かれているので、以下、まずこの報告について見ていく。

ゴンサレス・デ・ナヘラによればスペインでは、チリのインディオがスペイン人よりも体が大柄で、筋骨たくましく、動きも敏捷であるように信じられてきた[González de Nájera 1889:39]。どのようにしてこうした「超人的な」マプーチェ像が広まったのかについて具体的に述べられているわけではないが、スペインで広く読まれたエルシージャの叙事詩「ラ・アラウカーナ」に描かれた次のようなマプーチェのイメージをゴンサレス・デ・ナヘラが念頭に置いていたであろうことはまず間違いがなかろう。

「顔つきはたくましく、 髭はなし
 均整がとれた体で大柄で
 広い背中にそりたつ胸で
 手足は頑丈、 筋骨隆々
 敏捷、 身軽で威勢よし、
 快活、 勇敢、 大胆で
 苦労や致死の寒さにも
 飢えや暑さにもよく耐える」 [Ercilla 1970:40]

こうした「たくましいマプーチェ像」を、スペイン人と比較しつつ、顔つき、体格、俊敏さ、力、勇敢さといった点について一つ一つゴンサレス・デ・ナヘラは否定してゆく。以下彼の叙述を要約していく。

まずチリのインディオは、スペインで信じられてきたように、スペイン人以上に頑強な顔つきでも、均整のとれた体つきでもない。また、スペイン人よりもたくましくも大柄でもない。頑強な顔つきに見えるのは、彼らが髭をそっているからであり、たくましく大柄な体つきに見えるのは、衣服が簡素で、襟が開かれすぐないので、胸や腕、そして足もももまでむき出しになっているからにすぎないので[González de Nájera 1889:39-40]。

手足にしてもスペインの農民、馬車引きや馬子の方がよっぽど筋肉質であり、チリのインディオの手足は肉づきがいいだけで縫まりがない。なぜなら、果物と豆類ばかりを食べ、肉はまれにしか食べないからだ[Ibid.:41]。

また、彼らの動作だって決して軽快ではない。なぜなら、彼らは一般に怠惰で、俊敏さを鍛えようなどとはしないのだ。唯一軽快さを必要とする

彼らの遊戲チュエカ（ホッケーに似たスポーツの一種）を見ても大して俊敏な動作が見られるわけではないし、踊りの時も足の動きは実に鈍く、楽器の音に合わせて足先を地面につけたままかかとを持ち上げるだけではないか [Ibid.:41-42]。

またスペインではチリのインディオが、古代ギリシャのオリンピック競技の勇者ミロンや神話に登場する一つ目の巨人のようなけたはずの力持ちであると思われているが、自分がチリに滞在した間、そのようなインディオを見るどころかうわさを聞いたことすらありはしない。アラウコ地区の要塞で見た砲身運びの力比べの際でも、インディオたちはスペイン人に全くかなわなかつたではないか。だいいち、インディオの男たちは食うより宴会を開いて酒を飲んでばかりいる。だから、締まりのいい肉などつくはずがなかろう [Ibid.:42-43]。こうしてマプーチェの「力持ち」神話を打破したのち、さらに彼らの酒癖の批判に移る。

彼らの酒好きは度を超したもので、野原に宴会用の特別の場所をもうけ、しきりに酒盛りの集会を行なう。彼らが作る下賤な飲料以上に、スペイン人がもたらしたぶどう酒は宝物のように扱われる。だが、それにもかかわらず労働嫌いのため、反乱後に彼らが占有したぶどう畠で剪定をするものが一人もおらず、雑草だらけになってしまっている。つまり、酒好きなのだが、そのために働くことは嫌うのだ。彼らの怠惰ぶりは、世界中どこでも男の役割と決まっている農耕労働を女性にやらせていることからもわかるだろう [Ibid.:43-44]。つまりゴンサレス・デ・ナヘラは「酒好きの怠け者」といったイメージをマプーチェに見ているのである。

こうした労働を嫌う「怠け者」のマプーチェ像と対照的なのが、ピネーダ・イ・バスクニヤンの描くマプーチェである。ピネーダ・イ・バスクニヤンはゴンサレス・デ・ナヘラと同じ17世紀前半(1629年)に、レポクラ地区やインペリアル地区のマプーチェ集団のもとに捕虜として生活した時の経験を「幸せな捕虜生活(Cautiverio Feliz)」と題して執筆した。そこに現われるマプーチェの男たちはカシーケ衆も含め、共同で薪集めをしたり、畠の掘り起しや種蒔き、さらに料理の手伝いまで行なう勤労意欲に燃えた人々として描かれている [Pineda y Bascuñán 1989]。

また、酒癖の点については、ピネーダ・イ・バスクニヤンもしばしば酒宴の叙述をしていることから、よく酒が飲まれるということは共通し

ている。しかし、この場合もこうした習慣を必ずしも否定的に見ているわけではなくて、むしろ心地よい習慣として筆者自身もこれを楽しんでいたようなニュアンスで叙述されている [*Ibid.*]。

さて、「酒好き」とは言ったものの、食うことに関してインディオが節度を持っているわけでは決してない、とゴンサレス・デ・ナヘラは続ける。スペイン人の野営部隊が残していく牛の骨や馬の死骸といった汚らしい残骸にインディオがむしゃぶりついている間に、スペイン人の奇襲を受けて殺されることがよくある。また、ほとんどの者が今だに人食いの習慣を続けているし、どんなに汚らしく吐き気を催すような動物でも喜喜として平らげてしまう。いかに食い意地の張った連中かわかるだろう、というわけである [González de Nájera 1889:44-45]。

最後に、エルシージャによってさかんに称揚された「勇敢なインディオ」というイメージについても、見逃しはしない。スペイン人に勝ることはおろか、同じ程度の気力も勇気もチリのインディオは持ってはいない。もし奴らがある程度の勇気を示すことがあるとしても、それは自分たちの居住地域である堅牢な山岳地帯で対戦するからに過ぎないので。どんなにみすぼらしい犬っこでも、自分の住みかの入り口でなら、大柄のアラノ種の猛犬にさえ向かっていくものなのだ。こうした理屈で、ゴンサレス・デ・ナヘラは、チリのインディオがかくも長期間にわたってスペイン人に対抗できているのは、彼らが特別に勇敢だからではなく、その居住地区が難攻不落であるからに過ぎないと結論づける [*Ibid.*:50]。

さて、以上のようにゴンサレス・デ・ナヘラが、チリのインディオの肉体的特徴や勇敢さに関してわざわざ1報告をさき、スペインで持たれている「神話」を一つ一つ打破し、さらには労働嫌い、酒癖、食い意地といった点について軽蔑をこめて説明している理由は何だろうか。

ゴンサレス・デ・ナヘラはスペインにおいてあれほど交戦的という名をはせているチリのインディオが、実際には武器だけでなく、体つき、敏捷性、そして筋力の点でこれほどスペイン人以下であるなら、何故彼らがスペイン人に対してこんなに長期にわたって防衛できているのか、と問う、それには十分な要因があるからだとしている [*Ibid.*:45-46]。

具体的には、これらの要因は第2巻と第3巻で論じられている。

第2巻では、マプーチェ側がスペイン人に対して備えている有利な状況

を4点に分けて説明している。一つは、すでに見たことだが、マプーチェの居住地域がきわめて堅牢な地理的条件を備えていること。第二に、マプーチェがスペイン人側との戦闘の際、さまざまな抜け目ない策略を用いてくること。⁽¹⁾ 第三に、同じく戦闘の際に使用する馬の数がスペイン人側よりもはるかに多いこと。そして第四に、マプーチェ側に寝返ったスペイン人逃亡者を利用して戦闘をしかけてくること、以上である [*Ibid.*:85-122]。⁽²⁾

そして、第3巻では、和平の追求や効果の薄い襲撃方法など、スペイン人側の方針や戦略における誤りを5つに分けて説明している [*Ibid.*:127-194]。

このように見えてくると、スペインで持たれているマプーチェ像を、彼がこのように詳しい形で否定し、これと対照的な「マプーチェ」像を呈示している理由が、次のように推定されるのではないだろうか。

すでに見たように、この報告が書かれた17世紀初頭は、マプーチェ大反乱によってチリ南部におけるスペイン人支配の基盤が根底からゆきぶられ、こうした状況に対し、チリ植民地支配層は有効な戦略で対抗していく必要に迫られていた時期である。

こうした状況にありながら、スペインではマプーチェに対し「大柄で力持ち、しかも動きが俊敏」という、いわば「超人的なインディオ」像が信じられていた。エルシージャなどが呈示した「勇敢で不屈のマプーチェ」というイメージもある。これらのイメージは、ともすれば遠く離れたスペイン本国の人々の間で、マプーチェとの戦争に関する悲観的な展望を生むか、あるいは少なくとも、マプーチェ平定が失敗してきた原因を彼らの肉体的・精神的特徴に帰することによって、スペイン人側の戦略の問題点の反省を阻害する要因の一つになっていたのではないだろうか。

そこで、スペイン人と同等どころか、それ以下の体力しかなく、怠惰で酒のみの怠け者、勇気の点でもスペイン人以下、といいういわば「たくましからぬマプーチェ」のイメージを呈示することによって、マプーチェがスペイン人に抵抗できている「真の」原因を、彼らが生来備えている肉体的・精神的特徴といいういわば動かしがたい事柄にではなく、スペイン人側の、マプーチェやアラウコ戦争の実態に関する認識上の誤り、そしてそこから生ずる戦略上の誤りに求め、その修正を積極的に促す。

つまり、マプーチェ平定のより効果的な戦略を提案するための、いわば

基礎知識として、「たくましくも勇敢でもない」という「正しい」マプーチェ像を示す。こうした実践的戦略的な理由が「超人的マプーチェ」像の修正を試みた軍人ゴンサレス・デ・ナヘラの意識に働いていたのではないか、と推察される。

〈注〉

- (1) ゴンサレス・デ・ナヘラは第2巻でマプーチェが戦闘時に用いてくるさまざまな策略を具体的に説明し、その多くは称賛に値すると述べている [González de Nájera 1889:100]。したがって、少なくともこうした純軍事戦略的側面では彼はマプーチェの能力を積極的に評価しているように見える。だが、だからこそスペイン人側はマプーチェに対する認識を改め、戦略をより効果的なものに変える必要があるのだ、という形で、結局のところはマプーチェ平定を促進する目的でこうした叙述を行なっているに過ぎない。したがって、マプーチェに対する全体的なイメージは、以下(3)にみる「残酷な人食い」といったイメージも含めて否定的なものになっていることに変わりはない。
- (2) ナヘラは自らの体験も折り混ぜながら、スペイン人の兵士や神父、メスティーソの兵士などがマプーチェ側に逃亡し、彼らを軍事的に援助していることを重大視している。この点については拙稿(1991年)参照。一方既に見たように、マプーチェでありながらスペイン人側に軍事協力する「インディオス・アミーゴス」もいた。したがって、戦争といっても、既に17世紀初頭において、「スペイン人対マプーチェ」といった単純な図式ではとらえきれない、複雑な様相を呈していたことがわかる。

〈(下)に続く〉